

学校経営のポイント

“2006年PISA”の結果と対応努力

若井 彌一

去る12月4日、経済協力開発機構(OECD)は、参加国・地域57で行われた2006年国際学習到達度調査(略称PISA: Programme for International Student Assessment)の結果を発表した。

12月5日の新聞各紙は、「『ゆとり』弊害くつきり」「理数系トップ級転落」(『読売新聞』)、「どんどん下がる高1学力」(『産経新聞』)など、一面トップ扱いで大きく報じている。

得点も順位も下がり傾向だが

新聞報道の見出しで知られるように、わが国の高校1年生約6,000人(全国抽出185校)が参加したこの調査であったが、一部の例外を除いて、得点も相対的順位も下がり傾向が明白である。

この調査は、報道で知られるように、教科を横断した学力を評価するという観点から「教科」の枠組みでなく、大別して「読解力」「数学的応用力(活用力)」「科学的応用力(活用力)」という3つの内容で行われており、今回は「科学的応用力(活用力)」に重点を置いた調査であった(『読売新聞』による)。

「活用力」英語 literacy の訳は『産経新聞』による)。

2000年調査・2003年調査に次いで今回が3回目の調査であるが、わが国は『読解力』が8位(522点) 14位(498点) 15位(498点)、「数学的応用力(活用力)」が1位(557点) 6位(534点)

10位(523点)、「科学的応用力(活用力)」が2位(550点) 2位(548点) 6位(531点)という結果である(得点は、OECD平均500)。

高学力ということではなにかと話題になっているフィンランドの場合、「読解力」が1位(得点略)

1位 2位(1位は韓国556点)、「数学的応用力(活

用力)」が4位 2位 2位、「科学的応用力(活用力)」が3位 1位 1位という推移である。

科学への関心・学習への意欲の強化努力を

たしかに相対的順位は下がり傾向ではあるが、今後の改善方策を考え、実践していくという観点からは、生徒(もちろん、児童も含めて)の科学への関心の低さ、学力の相対的低位層(レベル1未満～レベル2までの範囲)の大きさに着目することが必要かと思われる。

「科学についての本を読むことが好き」な生徒は36%、「科学に関するテレビ番組を見る」、「科学に関する雑誌や新聞記事を読む」はそれぞれ8%で、・ ・ ・ともに参加国・地域57のうち最下位であるという(12月5日付け『朝日新聞』による)。

また、レベル2(全体はレベル1未満～レベル6)以下は、OECD平均よりは割合が小さいとはいっても、「読解力」「数学的応用力(活用力)」ともにフィンランドや韓国に比べて低位にとどまっている(同前)。

PISAは、順位(序列)を競うコンテストの趣旨・目的で行われるものではないのだが、他の参加国・地域の結果も参考になる。

参加国・地域のなかで、全体的に見れば、日本の生徒は比較的健闘しているのだが、上記の2点は今後の改善課題がどこにあるのかを示しているのではないか。高校だけでなく、中学校・小学校の取り組み課題でもあろう。

(わかい・やいち = 上越教育大学大学院教授・附属図書館長)

本紙は、<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●好評発売中！●

深谷昌志【編】A5判234頁・定価2,310円

教育開発研究所

『子どもの規範意識を育てる』

『「学力調査」対応法・活用法』

調査データの読み方／活用／保護者への説明
高階玲治【編】B5判272頁・定価2,500円